

大连理工大学二〇〇五年硕士生入学考试

《日语水平测试》 试题 共 12 页

注: 答题必须注明题号答在答题纸上, 否则试卷作废!

I. 文字と語彙(40点)

一、下の文の _____ のある漢字の読み方、または文の _____ に入れる外来語はそれぞれ選択肢 A, B, C, D の中から最も適切なものを一つ選び、解答用紙のその記号に印を付けなさい。(1×15=15点)

- (1) 茶菓のもてなしを受ける。
A ちゃか B ちゃかし C ちゃくだらない D ちゃけ
- (2) ついに馬脚を現した。
A ばきやく B まきやく C うまあし D ぼそく
- (3) 褒められて満更でもない。
A まんこう B まんざら C みちさら D みつさら
- (4) 清濁併せ飲む度量の大きさ。
A きよだ B きよだく C せいだ D せいだく
- (5) 大物を釣って魚拓を採る。
A さかなだ B さかなだく C ぎよだく D ぎよだ
- (6) ほっぺに飯粒がついている。
A はんりゅう B めしつぶ C はんり D めしり
- (7) 人生は万華鏡のように変わる。
A ばんかきょう B まんかかがみ C まんがきょう D まんげきょう
- (8) この本は受験生必携の書である。
A ひっけい B ひけい C ひつけい D ひかい
- (9) 彼は凝り性です。
A こりせい B しこりせい C しこりしょう D こりしょう
- (10) 給与所得から控除する。
A こうじょう B こうじょ C ひかえじょう D ひかえじょ
- (11) 乾湿球湿度計をとりつける。
A かわしつ B かわしけ C かんしけ D かんしつ
- (12) 外国文化への _____ が若者から完全になくなっているとは思わない。
A ヒーリング B ロマンティック C コンプレックス D エゴイズム
- (13) 我が家も古くなった。すっかり建て替えないまでも、せめて内装ぐらいは _____ しなれば。
A サポート B ケア C リファーム D リフォーム
- (14) 森を切り開いて _____ が建設されることになった。
A ニュータウン B ビルシェア C カントリー D マイホーム
- (15) 大金持ちではあるまいし、世界一周 _____ なんて、とてもできませんよ。
A アランド B グランド C クルージング D クルーズ

二、次の文の下線をつけた言葉の二重線をつけた部分は、どのような漢字を書く
は選択肢 A, B, C, D の中から同じ漢字が使われるものを一つ選び、解答用紙のその記号に印
を付けなさい。(1×10=10点)

1. 夜中に突如ほっさが起きた。

A 人種によってさべつするのはいけない。 B ここではこんなことは日常さはんじですよ。
C 毎年一回身体けんさをする。 D さぎょうふくを着てデートするなんて、、、
2. じゃねんを払い、受験勉強に励む。

A 予算からねんしゅつした分、みんなで分けよう。
B しょねんどの支出はなるべく控えめにしなくちゃ。
C 忘れ物をしたら困るからねんのためにもう一度みんなに注意を促した。
D あの壺は高級そうに見えるが、実は子供用のねんどで作った。
3. 車にえきしょうテレビをつける。

A 大連のえきまえはいつも人でいっぱい。
B 膨大なりえきを求めためばかりで、自然破壊に目も向かぬい。
C じゅえきシートで作られたものです。
D えきいんさんの話によると、列車は一時間も遅れている。
4. ぼくじゅうを使って書き初めをする。

A 彼のお父さんはすいぼくえの名人です。
B あんなこと、ぼくじしんの趣味とあんまりにもかけ離れている。
C どうざいなんぼくって、中国の字じゃないか。
D そのとき、どうしてもはいぼくを認めたくなかった。
5. 夜中に目が覚まし、みんなを起こさないようてんとうしないままにした。

A てんきよほうによると、午後から雨だそうです。
B 彼は作文を書かずに、紙にてんとせんだけを書いた。
C 作文のてんさくは何時も夜中にするそうです。
D その食品はてんかぶつが絶対無いとメーカーの方は言ったが、果たして如何でしょう。
6. 旅館のじゃのめ傘を差して出かける。

A じんじゃの多い町として名が知られている。
B 終わったらじゃぐちをしっかりと閉めてください。
C じゃまもの扱いされては困る。
D かんじゃさんに優しくしてあげる。
7. そのえんだんは結局長続きしなかった。

A 彼女はえんかく恋愛に疲れた。
B 問題をえんまんに解決しようと、みんな団結一心にしないといけない。
C 卵はだえんけいなのに、その子が書くと何時もまん丸よ。
D やはり、えんがあって集まったのですよ。
8. 要点をことさらに強調した。

A 果物をさらいっぱい盛って、みんなで囲んで食べた。
B さらさらな雪ってどんな感じ、一度見てみたいな。
C いまさら、何を言っても間に合わない。

- D こさらをもう一個ください。
9. えんどうを掃いて清める。
- A その道はえんえんと沈陽まで続く。
- B クリスマスパーティーはえんまんに行われた。
- C 皆さんはえんがあったからこそこに集まってきたのでしょうか。
- D 海のえんがんには高級マンションがいっぱい建てられた。
10. 無人島にひょうちやくした。
- A ひょうはくざいを入れると洗濯物は白く見えるが、皮膚への影響もないとは限らない。
- B 今年の米はひょうじゅん以下。
- C 今ひょうづくりの練習を特訓中。
- D 先とはうっと変って、あのひょうへんぶりと叫びたらない。
- 三、下の文の _____ に入れる言葉は選択肢 A, B, C, D の中から最も適切なものを一つ選び、解答用紙のその記号に印を付けなさい。(1×15=15 点)
1. 雲が出て _____ が陰ってきた。
- A 日 B 空 C 天気 D 青空
2. 雰囲気違和感を _____ 。
- A 思う B 感ぜる C する D 覚える
3. 愛煙家は _____ が狭い。
- A 場合 B 心 C 片手 D 肩身
4. 書類に記名 _____ する。
- A サイン B 押印 C 記入 D 入れ
5. チェロの _____ な調べを聞く。
- A 甘美 B 流暢 C うっとり D 多彩
6. _____ の試練を乗り越える。
- A たびたび B あたりまえ C 数ある D 幾多
7. 年賀状に _____ と書く。
- A 迎春 B 新年 C クリスマス D 春節
8. すごい _____ で怒鳴り込む。
- A 意気 B 度胸 C 愛想 D 剣幕
9. 恒例に従い _____ で終わる。
- A 最後 B 歌に C 手締め D 手拍子
10. 更正して今は _____ になった。
- A だめ B 堅気 C おわり D 軌道
11. 風邪で学級 _____ になった。
- A 崩壊 B 氾濫 C 閉ざし D 閉鎖
12. 人間というのは、いったん楽をすともう _____ には戻れない。
- A 前 B 前面 C うしろ D あと
13. 城の兵糧米が _____ 。
- A 尽きた B 終わった C あまり D 大分だ
14. 禍を転じて福と _____ 。

A する B させる C なす D なせる

15. _____ が悪い不肖の子。

A 顔 B 面子 C でき D 勝負

II 文法と構文 (1 × 30 = 30 点)

下の文の _____ に入れる言葉は選択肢 A, B, C, D の中から最も適切なものを一つ選び、
解答用紙のその記号に印を付けなさい。

1. 「あ、雪が降ってきた。() 寒いわけだ。
A やっぱり B どうしても C なんといいて D どうりで
2. 若いうちは、悩みがあったら悩み ()。そして人は成長していくのだ。
A とおし B ぬいて C ぬけ D
3. 夜の原宿の街に集まる少女たちは、なぜか黒 () の服装を好む。
A っぽい B ずくめ C だらけ D ばかり
4. その俳優は5ページ () 長いせりふをすぐに覚えてしまった。
A もあり B いじょうに C からある D からなる
5. こういう勇敢な行動は、あの人 () 初めてできることです。
A だから B からして C にして D だって
6. この小説は事実に () かかただけあって、迫力がある。
A よって B 際して C もとづいて D 反して
7. 感激の () か、花嫁は突然泣き出した。
A きわみ B あまる C しすぎ D せい
8. 来週、ちょっと入院することに () んです。
A した B する C しまった D なった
9. あの人はお金があり ()、とてもけちです。
A そうで B ながら C がち D すぎて
10. 9月とは ()、まだまだ残暑が厳しい。
A いってて B かぎりで C いうものの D したら
11. 試験の結果は、一週間後に書面を () お知らせします。
A もって B ふくめて C なして D つくって
12. 今日 () 禁煙することにしました!
A をして B にして C をめどに D をかぎりに
13. 何かの () 私のことを思い出したら手紙をくださいね。
A 折に B 時期に C 機会に D 季節に
14. 数学は高度情報社会に ()、必要な教養となっている。
A あって B たいして C いながら D ちよくめんして
15. ずっと本を読んでいて急に立ち上がった ()、めまえがしました。
16. 「盗作する」とは、他人の作品を自分の作品であるかの () 発表することである。
A ような B ごとく C ごとし D みたく
17. 試合の () 突然雷が鳴って、大粒の雨が降り出した。
A とたん B 先立って C 最中に D 際して

18. 彼はポテトフライが好きで揚げる () どんどん食べてしまうので
- A うちに B に先立って C そばから D かと思うと
19. 山田 () に負けるものか。
- A たぐい B ごとく C ごとし D ごとき
20. 彼は五年前に事故を起こして以来、 ()。
- A これからも運転するつもりです B 二度と運転しないだろう。
- C 一度も運転していない。 D 一度運転した。
21. ここは、バイクぐらいなら置けでも、自動車を置く () スペースは無さそうだ。
- A だけの B どころの C ばかりの D まで
22. 外国に () さえすれば外国語が話せるようになるというのは、間違いだ。
- A 行って B 行く C 行き D 行こう
23. この会社に () 彼の影響力は、どんどん大きくなっていった。
- A ある B おく C おける D 伴う
24. このレストランはあまり綺麗とは言えないが、味 () はこの辺では一番だ。
- A として B にかけて C につれて D に沿って
25. 会社の規模が拡大するに ()、以前のような家庭的な雰囲気はなくなってきた。
- A したがって B とともに C あたって D 比べて
26. 鬼の () 間に洗濯
- A いる B にげない C ある D いぬ
27. あの政治家に () 悪い噂を、あちこちで耳にする。
- A あたる B わたる C 関する D めぐる
28. では、パンフレットに () 説明をしていきます。
- A 沿って B 応じて C つれて D 至って
29. この番組では、視聴者からのリクエストに () いろいろな曲を放送している。
- A かけて B かかわる C こたえて D 則して
30. 調査の結果は、我々の予想に () あまり望ましいものではなかった。
- A 応じて B 伴って C 通じて D 反して

III 読解 (51点)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい

一. (問1は1点、後は2点ずつ=25点)

人間には、身体的なエネルギーだけではなく、心のエネルギーというものもある、と考えると、物事がよく了解できるようである。同じいすに一時間座っているにしても、一人でぼうっと座っているのと、客の前で座っているのでは疲れ方が全く違う。身体的には同じことをしていても「心」を遣っていると、それだけ心のエネルギーを使用しているので疲れるのだ、と思われる。

このようなことはだれしもある程度知っていることである。そこで、人間はエネルギーの節約に努めることになる。仕事など必要なことに使うのは仕方ないとして、不必要なことに、心のエネルギーを使わないようにする、となってくると、人間がなんとなく無愛想になってきて、生き方に潤いがなくなってくる。他人に会う度に、ここにこ

していたり、相手のことに気を遣ったりするとエネルギーの浪費になるという
ことになる。時に、窓口などに、このような省エネの見本のような人を見かけることが
ある。全くもって無愛想に、邪魔くさそうに対応をしているのである。そのくせ、疲れた顔をしたりしているところが、おもしろいところである。

これとは逆に、エネルギーが有り余っているのか、と思う人もある。仕事に熱心なだけでなく、趣味においても大いに活躍している。他人に会うときも、いつも元気そうだし、いろいろと心遣いをしてくれる。それでいて、それほど疲れているようではない。むしろ、人よりは元気そうである。

このような人たちを見ていると、人間には生まれつき、心のエネルギーをたくさん持っている人と、少ない人とがあるのかな、と思わされる。いろいろな能力において、人間に差があるように、心のエネルギー量というのにも生まれつきの差があるのだろうか。

他との比較ではなくて、自分自身のことを考えてみよう。例えば自分が碁が好きだとして、碁を打っているために使用される心のエネルギーを節約して、もう少し仕事のほうに向けようと考えてみるとしよう。そこで、友人と碁を打つ回数を少なくして、仕事に力をいれようとして、果たしてうまく行くだろうか。あるいは、今まで運動などまったくしなかったのに、ふと友人に誘われて、テニスを始めると、それがなかなかおもしろい。だんだんと熱心にテニスの練習に打ち込むようになる。そんなときに、仕事のほうは、以前より能率が悪くなっているだろうか。案外、以前と変わらないことが多い。テニスの練習のために、以前よりも朝一時間早く起きているのに、仕事をさぼるどころか、むしろ、仕事に対しても意欲的になっている、というときもあるだろう。

もちろん、物事には限度ということがあるから、趣味に力を入れれば入れるほど、仕事もよくできる、などと簡単には言えないが、ともかく、エネルギーの消耗を片方で抑えると、片方で多くなる、というような単純計算が成立しないことは了解されるだろう。片方でエネルギーを費やすことが、かえって他のほうに用いられるエネルギーの量も増加させる、というようなことさえある。

以上のことは、人間は「もの」でもないし「機械」でもない、生きものである、という事実によっている。

人間の心のエネルギーは、多くの「鉱脈」の中に埋もれていて、新しい鉱脈を掘り当てると、これまでとは異なるエネルギーが供給されてくるようである。このような新しい鉱脈を掘り当てることなく、「手持ち」のエネルギーだけに頼ろうとするときは、確かにそれを何かに使用すると、その分だけどこかで節約しなければならない、という感じになるようである。

このように考えると、エネルギーの節約ばかり考えて、新しい鉱脈を掘り当ててのを怠っている人は、宝の持ち腐れのようなことになってしまう。あるいは、掘り出されないエネルギーが底のほうで動くので、なんとなくいらいらしていたり、時にエネルギーの爆発現象を起こしたりする。これは、いつも無愛想に、感情をめったに表に出さない人が、ちょっとしたことで、カット起こったりするような現象として現れたりする。

自分の中の新しい鉱脈をうまく掘り当て行くと、人よりは相当に多く動いていても、

それほど疲れるものではない。それに、心のエネルギーはうまく流れると効率 第7 页 のなのである。他人に対しても、心のエネルギーを節約しようとするよりも、むしろ、上手に流してゆこうとするほうが、効率もよいし、そのことを通じて新しい筋脈の発見に至ることもある。心のエネルギーの 出し惜しみ は、結果的に 損につながる ことが多い い ものである。

- 問1 「一人でぼうっと座っているのと、客の前で座っているのでは疲れ方が全く違う。」とあるが、どう違うと言えますか。
- 問2 「このようなこと」とは何を指しますか。
- 問3 「エネルギーの節約に努めることになる」のはどのようにすることですか。
- 問4 「不必要なこと」の例として、筆者はどのようなことを挙げていますか。
- 問5 「邪魔くさそうに対応をしている」とは、どういう対応ですか。
- 問6 「全くもって無愛想に、邪魔くさそうに対応をしているのである。そのくせ、疲れた顔をしたりしているところが、おもしろい」とあるが、なぜそういえるのですか。
- 問7 「このような人たち」とは、どのような人たちを指しますか。
- 問8 「果たしてうまくゆくだろうか」という問に対する直接の答えとなる部分が本文にはない。そこで、文脈から判断して、その答えと、答えの理由を述べなさい。
- 問9 筆者が「案外」と言っているのはなぜですか。
- 問10 「単純計算」とは、この場合、どういう点が「単純」と言えるのですか。
- 問11 「人間は『もの』でもないし『機械』でもない」と筆者があえて言っているのはなぜですか。
- 問12 「出し惜しみ」とは、この場合、何をどうすることですか。
- 問13 「損につながるが多い」のはなぜですか。

二. (問6と問8は1点、後は2点ずつ=26点)

「音楽をやるのなら、人のまねをしないで、自分の作った歌を歌い、自分で書いた曲をやるのでなければ_____。いくらショパンの曲がきれいだ、モーツァルトの歌が美しいといたって、しょせんは他人のもの。自分の気持ちとは違うのだから。」と、ある人が言った。

当たってる点もあるけれど、肝心なところで間違っていると思う。

なにも音楽に限ったわけではない。芸術というものには、そんなに他人のもの、自分のものときっぱり区別できないところがある。しかも芸術のいちばんの大本は、そこで生まれ、そこで育った。

ちょっと考えてみよう。

絵が好きだといって、では自分で描くことだけが大切で、他人の絵なんか見たってつまらないということになるだろうか？

自分でばらの花を描き、風景をスケッチしているだけで、後はレンブラントもセザンヌも宗達も鉄斎も、ピカソもクレーも、要するに他人のしたことだからつまらないということになるとしたら、それは、その人の心がますます貧しくなるというだけの話ではないだろうか。

芝居は自分で書き、自分で演じることだけが大事で、他人の芝居なんか見たって、ど

うせ自分とは違うのだからつまらない、なんの役にも立たぬ、暇つぶしにすぎないことになるのだろうか？それどころか遠い西洋の、それも紀元前の古い古いギリシアの悲劇のほうが、日本の私たちの同時代の人の芝居よりずっとおもしろいということもあるではないか。

こういうことは、どんな人も、日常の経験で知っている。その絵なり芝居なりが、見ているこちらに、ピンと来る何かを持っていなければ、おもしろくもなんともないというのは本当だけれど自分には自分の作ったものだけが、ピンと来るのであって、ほかの人が作ったのでは、そうならないというのではない。何かを見たり、聞いたりしていると自分のものではないにもかかわらず、また、いろんな所で自分とは違っている点があるにもかかわらず、それでも自分がやったのでは、とてもこうは書けないと思われるほど、自分の言いたいこと、自分の感じていることが表されていて、それを見ていると、心が休まるとか元気付けられるとかしてくる、そういう経験をしたことのない人なんて、あるだろうか？

何かを見ていて、ピンと来るというのは、自分と向うとの間に交流がある、対話があるということにほかならないのであって、芸術は、その対話、交流、響き合いの中にこそ、あるのだ。芸術とは、人が見ようと見まいと、既に遠い知らない所で、誰かの人によって作られ、存在してきたものだということではない。なるなるほど、北斎の富士山の版画は、私の生まれるずっと前に描かれ、私なんか生まれようと生まれまいと、多くの人々をびっくりさせたり、感心させたり、多くの人々に愛されたりしてきたのは事実だ。しかし、それでも、この絵は北斎一人のものではない。みんながこの絵から何かを感じるということがなかったら、誰にもかまいつけられず、幾つにも切り刻まれ、燃やされたり、捨てられたりしたのではないだろうか？現に、この版画が刷られてから今日に至る間にも、この絵を見て、つまらないと思って、捨ててきた人も大勢いたに違いない。だからこそ、この版画の本物は、今はめったにお目にかかれなくなったのである。また、それとは逆に、今日では、ひどい複製で見てさえ感心する人の数は何万だか何十万にも上がるようになったというのは、この絵と話を交わす人々の列に加わる人の数が、後から後から、ひっきりなしに生まれ、育ってきているという事実を示しているわけだろう。芸術は以上のすべての総合した働きの中にある。

この事情は音楽についても、少しも変わらない。人の作った音楽を歌ったり、演奏したり、聴いたりするというのは、モーツァルトや何かと話をしていることであり、自分では発見できない、いろいろな美しい話を聞かされたり何かしている間に、自分が寄り自由になり、大きくなり、あるいは軽くなり、たとえ自分では気が付かない場合があるにしても、相手と一緒にあって、それまでなかった一つの新しいものを経験するということにほかならない。

それに、人の作ったものを相手にしているために、かえって、自分の経験をより自由に、新鮮に、率直に表す事ができるという事情があることも無視できない。私がシューベルトの歌を歌うとしても、それは彼の真似をすることにはならない。それで私が彼に似るわけでもなし、ましてシューベルトが私になるわけでもない。どっちのものというのではなくて、その間に一つの響き合うもの、つまりハーモニーが生まれてくるとしたら、それが「音楽」なのである。それに、私が歌うという、その「私」も、いつも同じではなく時とともに変わるのだし、それに応じて、同じシューベルトの歌か

から生まれてくるものも変わってくる。

例えば、あらゆる「春」の音楽、春の歌を通じて、私はシューベルトの〈春の信仰〉という歌が一番好きだ。これは、柔らかな風が目覚まし、夜となく、昼となく、すべてのものの上を和やかに吹き通う。新しい香り、新しい響き！（僕の）弱い、哀れな心よ、もう心配はいらない。すべてが、すべてが変わってゆくのだ。

とでもいった**歌詞を持っている歌であるが**、細かい動きを持って休みなく流れてゆく伴奏に乗って、穏やかにそれこそ春の風がどこからともなく吹いてゆくような旋律を持った歌曲で、私は最初知った十六、七のころから、今に至るまで、愛し続けてきた。何も「春」に限らない。何かは速く、はるかなほうに芽生え、それが目には見えないけれど、なんとはなしに、しかし、否定しがたく明確にだんだん近くにやってくる——甘く柔らかい香りのように——**そういう気配を一つの「形」に封じ込むのに成功した**作品。「音」だけを使って、これができたということ自体、一つの奇跡のような話だけれど、そういうことはまた「音を組み合わせるだけ」でやるのでなければ、ほかにやりようがないのかもしれない。

静かだが、大きく深い喜びの予感を乗せて、はるかから、物の近づく気配。その香り。全体三分そこそこのこの小さな音楽を知ったときこそ、私の青春の決定的な時の刻印として、私にとって絶対的な意味を持つものだった。

ところが、はっきり思い出せないけれど、**ここ数年来、同じ音が、春の音楽であるよりも、柔らかい慰めの音楽の響きが変わって聞こえるようになってきた**。かつては、静かだけれど、いつも音を立てて流れてやまない、喜びにあふれた音楽だったものが、このごろは優しく淡くて、まるで「音」でなくて、その音の幻影のように聞こえてくるようになった。歌詞で言えば「もう心配はいらない。すべてが、すべてが、変わってゆくのだ。」に当たる終わりの部分が、まるで、かつてよく聞いていた歌の、懐かしい余映、残響のように聞こえてくる。

「本当にそうだ。そうに決まっている。」と、これが聞こえるたびに私は思う。「いつまでもこういう具合ではなくて、いずれはすべてが変わるんだ。だが、そうと分かった以上は、何も急ぐに当たらない。変化よ、どうぞ、ゆっくり来てください。」

以来、この歌が、私にとって、どんな大きな慰めになったか、それは書き切れない。

- 問1 「自分で書いた曲をやるのでなければ_____。」の後ろに省略されている内容は、
 どのような表現が考えられるか、10字以内で述べなさい。
- 問2 「当たっている点もあるけれど、肝心なところで間違っていると思う。」について、
 ①「当たっている点」と②「肝心な所」とは、それぞれどういうことですか。
- 問3 二つの「そこ」は具体的に何を指していますか。
- 問4 「その人の心がますます貧しくなる」のはなぜですか、簡潔に述べなさい。
- 問5 「こういうこと」とは、具体的に何を指していますか、その箇所初めと終わりの
 五字を抜き出しなさい。
- 問6 「絵なり芝居なり」の「なり」と同じ用法のものを次の中から選びなさい。

- ア. . 一冊だけなり買ってほしい。
- イ. 友人なり来ればいい。
- ウ. 行くなりやめるなりなさい。
- エ. 果物は皮なり食べられる。
- オ. どこへなり行きなさい。

問 7 「ピンと来る何か」について

- ①どういう意味ですか。
- ②このことを説明している部分の初めと終わりの五字を抜き出さなさい。

問 8 「芸術は、その対話、交流、響き合いの中にこそ、あるのだ。」について、①具体的に 50 字前後で説明しなさい。

- ②説明として、最も適切なものを、次の中から選びなさい。

- (ア) 芸術は、他人のものの見聞、演奏を通して、自分の未発見のものを、他者と共有するという経験であること。
- (イ) 芸術は、他人のものの見聞、演奏を通して、自分の未発見の、気づかないものを新たに感動、発見する経験であること。
- (ウ) 芸術は、自分の他の作品の吟味を通して、今まで気づかなかったものを発見、感動する一つの新しいものの経験であること。
- (エ) 芸術は、他人の作品を模倣することを通して、他者にはない独自の、新鮮な芸術を作り出す新しい経験であること。

問 9 「なるほど、北斎……。しかし、それでも……」に見られる文体の説明として適切なものを次の中から選びなさい。

- (ア) 「なるほど」以下で消極的肯定をし、「しかし」以下で積極的肯定内容を述べている。
- (イ) 「なるほど」以下で全面否定し、「しかし」以下で肯定的内容を述べている。
- (ウ) 「なるほど」以下で部分肯定し、「しかし」以下で否定的内容を述べている。
- (エ) 「なるほど」以下、「しかし」以下ともに、肯定的内容を述べている。

問 10 「相手といっしょになって……経験するということ」と同じ内容を、「芸術」の場合ではどう表現しているか、本文中から 10 字以内で抜き出さなさい。

問 11 「かえって」について

- ①この語の品詞と意味を答えなさい。
- ②「かえって」は、この場合どのようなことを前提とした表現ですか。

問 12 「彼のまねをすることにはならない」のはなぜですか。

問 13 「歌詞を持っている歌であるが……」について

- ①この「が」を文法的に説明しなさい。
- ②この「が」と同じものを、次の中から一つ選びなさい。

- (ア) 寝る前に読もうとしたが、すぐ眠くなった。
- (イ) 心当たりへ電話で聞いたが、行方が分からない。
- (ウ) 堂々たるスピーチだったが、年季とともに哲学を感じさせた。
- (エ) 私はむっくり起き上がろうとしたが、止めた。

問 14 「ここ数年来、同じ音が、……聞こえるようになってきた。」とあるが、この箇所は、前述のどの箇所と呼応しているか、その箇所を含む一文の、最初の五

五字を抜き出しなさい。

IV 日译汉 (29点)

「言語研究のジレンマ」

言語研究には絶えず克服しがたいジレンマがつきまとう。言語のような、心理学的・社会的に見て、多種多様な要素からなる複合体を対象とする研究には、そこに含まれる諸相を、先入観にとらわれずに、無垢で客観的な目をもって観察・考察する必要がある。この無垢な目にこそ事の真実が映しだされるはずだからである。しかしこの無垢な目に映るものは、多くの場合、我々の期待とは裏腹に、いわば背景と図の明確な区別を欠く、研究の対象としてはなんら意味をもたない連続的事象の現出にすぎない。そこで、切れ目のない諸事象から、研究の対象としての有意義な図を引き出すためには、特定の思考の枠組み、いわゆる理論という眼鏡が必要となろう。この理論という眼鏡は、先達の営々たる観察と思考の結果として我々のために用意されているものである。この眼鏡によって我々は、研究の対象としてなにを見るべきか、なにを除外すべきかを教えられる。すなわち、有意義な研究対象が画定されるのである。かくして、我々は、背景と図の明確な区別がつけられない無垢な目から解放されることになるのである。

しかし、そこには、危険な落とし穴が待っている。ひとたびこの理論という眼鏡を通して映しだされてしまうと、いかなる事象も確固たる事実として我々の眼前に立ち現われる。そしてその事実は、しだいに自己増殖、自己拡大をひきおこして瞬く間に我々の視野を覆いつくし、他の事象を見えなくしてしまう。理論という眼鏡が図として引き出した事象が、背景をなす事象を見えなくしてしまうというパラドックスが生じるのである。もし見えるものだけが真実であるならばそれでよい。しかし、我々のためにすでに用意されている特定の理論という眼鏡は、はたして我々のために、真実そして真実のみを写し出してくれているのであろうか。

言語研究には、我々を言語に対する無垢な目から解放してくれる幾つかの言語理論という眼鏡が用意されている。そして当然、我々はその眼鏡の1つをかけなければならない。そうしなければ、有意義な言語事象がほとんど見えないからである。言語理論という眼鏡は、言語研究にとって有意義であると思われる言語事象を我々の目に映し出す。と同時に、映し出される言語事象の背後にある他のすべての言語事象をしだいに見えなくしてしまうのである。見える部分に、言語研究にとって重要な諸事象が現れていることが多いのは確かであるが、見えなくなった部分に言語の真実により近い言語事象が隠されているという可能性は、否定できない。それゆえに我々は、言語理論という眼鏡をはずし、無垢で客観的な目に戻らなければならない。するとそこには、先入観にとらわれない観察と考察を求める諸言語事象が横たわっている。しかしそれらは間もなく、再び無意味な言語事象の連続と化していくのである。

このようなジレンマは、他の学問領域と同様に、言語研究にも絶えずつきまとい、我々の言語研究の過程に繰り返して現れて、克服しがたい障壁とさえなることがある。しかしながらこのジレンマは、それが大きければ大きいほど、また多ければ多いほど、それだけ我々の言語研究の質を高めその内容を豊かにしてくれるとは言えないだろうか。

いう眼鏡をはずし、言語事象の連続と化していくのである。無垢で客観的な目に戻らない。するとそこには、先入観にとらわれない観察と考察を求める諸言語事象が横たわっている。しかしそれらは間もなく、再び無意味な言語事象の連続と化していくのである。

このようなジレンマは、他の学問領域と同様に、言語研究にも絶えずつきまとい、我々の言語研究の過程に繰り返して現れて、克服しがたい障壁とさえなることがある。しかしながらこのジレンマは、それが大きければ大きいほど、また多ければ多いほど、それだけ我々の言語研究の質を高めその内容を豊かにしてくれるとは言えないだろうか。